

■原著

意味のある作業とは — 1995 年～ 2010 年における国内事例報告の質的検討 —

The concept of meaningful occupation in Japan
— An examination of case studies from 1995 to 2010 by qualitative analysis —

大松 慶子¹, 石井 良和², 山田 孝³

Keiko Omatsu¹, Yoshikazu Ishii², Takashi Yamada³

要 旨：我が国の作業療法士が使用する意味のある作業、価値を置く作業、重要な作業など（以下、意味のある作業と略）の内容と特性を、内容分析を用いて検討した。対象は国内で 1995 年度から 2010 年度に発表されたこれらの言葉を用いた 26 件の事例報告論文である。結果、生成したのは《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》《心身機能と行動の改善を促す》《他者との関係に変化をもたらす》《希望をもたらす》《新たな自分につながる》の 7 カテゴリーであった。作業療法士はこのうち《自ら意思表示した》《生活史の中にある》《新たな自分につながる》のどれかのカテゴリーを含む作業を、意味のある作業とみなす傾向があると考えられた。意味のある作業は、クライアントの自分に対する理解と人生にかかわり新たな自分を再構築する、作業療法士が援助する作業であると考えられた。

キーワード：意味のある作業、作業療法、質的研究

I はじめに

作業療法（以下、OT）の中で、意味のある作業という言葉が聞かれるようになって久しい。意味のある作業という言葉は創世期の作業パラダイムに機械論パラダイムの知識を加えた新たな作業パラダイムで現れた^{1,2)}。このパラダイムで重要とされるのはクライアント中心、作業への焦点、根拠にもとづいた実践である^{3,4)}。意味のある作業は、我が国では 1990 年代から使われ始めた。また、同様に使用されている言葉には価値を置く作業、

重要な作業などの、作業を修飾する部分に意味、価値、重要を用いた言葉が多く使用されている^{5,6)}。

意味のある作業の定義について、カナダ作業療法士協会は「個人や集団や地域にとって個別的意味があり納得のいく経験を促すために、選択され、遂行される作業」としている⁷⁾。諸外国では、意味のある作業における意味とはクライアント独自のものであり、その作業に従事することは人生の質に貢献すると言われている^{8,9)}。では、我が国

1 関西学研医療福祉学院作業療法学科 Division of Occupational Therapy, Kansaiagakken Medical Welfare College

2 首都大学東京大学院人間健康科学研究科 Graduate School of Human Health Science, Tokyo Metropolitan University

3 目白大学大学院リハビリテーション科学研究科 Graduate School of Rehabilitation Science, Meiji University

の作業療法士(以下、OTR)が用いる意味のある作業や、価値を置く作業、重要な作業など類似した言葉が指し示す作業はどのようなものだろうか。西洋と我が国との文化的な異なりは周知のことであり^{10,11)}、各社会集団は、それぞれの文化や関心に基づいて言葉の観念を決定するという^{12,13)}。

本稿では、作業を修飾する部分に意味、重要、価値を用いた類似した作業を「意味のある作業」と表現する。そして、日本のOTRによって書かれた事例報告論文の中から「意味のある作業」について述べられた文章を抜粋し、再解釈する方法で「意味のある作業」のカテゴリーと特性を検討した。これにより、我が国のOTRによるこれらの言葉を使用した文章の、より明快な読解に貢献できると考える。

II 方法

1. 対象

1995年度から2010年度に発行された雑誌から、OTRが筆頭筆者である事例報告であって、対象事例が「意味のある作業」に組み込みその変化について記述した投稿論文を、医学中央雑誌の文献検索(2011年7月21日実施)で抽出した。事例報告は文中で使用されている「意味のある作業」の意味や文脈を読み取りやすく、また、他の活字文献に比べ臨床のOTRの考えを最も直接に反映しているためである。キーワードは、意味 and 作業、価値 and 作業、重要 and 作業とした。しかし、この文献検索では1990年代の文献は挙がらなかった。そのため、「作業療法」「作業療法ジャーナル」「精神認知とOT」「臨床作業療法」「作業行動研究」「作業科学研究」の、特別号を除く対象期間の全冊子を対象に手検索を行った。その際、作業を作業活動や活動と表現した文献も対象とした。

2. 分析・検討方法

1) 対象論文の著者が「意味のある作業」としている作業について、その作業が「意味のある作業」である理由を記述した箇所を抜粋した。理由が明確に示されていない場合は、文脈から、著者が理由として挙げているクライアントの言動や変化の記述を抜粋した。

2) 抜粋した記述をLincoln & Gubaによる内容分析の手法¹⁴⁾に沿って分析した。分析は、身体・老年期障害領域の経験30年の第一筆者、精神障害領域の経験32年のOTRと身体障害領域の経験11年のOTRの3名により実施した。分析過程は以下の通りである。

- ①記述を意味ごとに区切り、カード化した。
- ②最初のカードの内容を読み、一箇所に置き、これを仮カテゴリーとした。
- ③2番目のカードを読み、その内容が②の仮カテゴリーと似ているかどうかを判断した。似ていれば仮カテゴリーに入れ、似ていなければ新たな仮カテゴリーとした。
- ④続くカードも③と同じ方法で分類を続けた。新たな仮カテゴリーを形成するように思えないカードは、1つに集めた。
- ⑤④でできた多様なカードの集まりからカードを取り出し、既にある仮カテゴリーに入れるか別の仮カテゴリーとするかを検討した。
- ⑥全てのカードが分類された後、数回にわたり仮カテゴリーの関係を検討し、カテゴリーと前段階の下位カテゴリーに名前をつけた。
- 3) 生成されたカテゴリーとその内容を確認した。
- 4) 各事例報告に含まれているカテゴリーを明らかにし、カテゴリーと作業従事との関係および「意味のある作業」を象徴するカテゴリーについて検討した。

III 結果

1. 対象

医学中央雑誌による文献検索の結果、56文献が示された。手検索の結果を加え、OTRが筆頭筆者であることや投稿論文であること等とした前述の条件に照らして検討し、25文献26事例報告を対象とした(表1)。

2. 「意味のある作業」の言葉の分類

事例報告で使用されていた「意味のある作業」の表現と件数は、「意味のある作業」が9件、「意味ある作業」が5件、「価値を置く作業」が4件、「価値ある作業」が3件、「意味と目的のある重要な作業」が2件、「興味・価値に基づく作業活動」が1件、「興味・価値を置く活動」が1件、「意味のあ

表 1 対象文献

事例報告 No	題名	著者	雑誌名	Vol	No	年
1	ある女性高齢障害者に対しての人生観を考慮した作業療法	岸上博俊, 村田和香	作業療法	19	2	2000
2・3	作業遂行プロセスモデルを利用した事例報告 事例1 事例2	原田千佳子, 吉川ひろみ, 近藤敏, 他	作業療法	20	6	2001
4	作業療法介入過程モデル (OTIPM) に基づくアプローチ	建木建, 建木良子, 斎藤さわ子	西尾市民病院紀要	12	/	2001
5	作業的存在としての対象者を援助することの意味—慢性 期精神分裂病の一症例を通じて—	一原里江, 小川小枝子, 青山宏, 佐藤剛, Florence A. Clark	作業療法	21	5	2002
6	高齢脳性麻痺者の語りを通じた人生と作業療法の個人的 意味づけ	野藤弘幸, 山田孝	作業行動研究	6	2	2002
7	長期に院精神分裂病患者に対する集団精神療法の治療的 利用	四本かやの	神戸大学医学部 保健学科紀要	18	/	2002
8	「作業に関する自己評価」により, 状態悪化を引き起こし ていた友人の死別体験が明らかになった高齢障害者に対 する支援	山田孝, 石井良和	作業行動研究	7	1	2003
9	人間作業モデルは新人作業療法士に効果ある作業療法を 可能にさせた	京極真, 野藤弘幸, 山田孝	作業行動研究	7	1	2003
10	知的機能を必要とする作業が情動の変化に与える影響— ワープロ作業への取り組みに伴い暴力行為が減少した1 症例の検討から—	竹田里江, 青山宏	作業療法	24	6	2005
11	通所リハビリテーションにおいて詩吟の先生の役割を再 獲得した1症例	小川真寛, 藤原瑞穂, 常本浩美	作業療法	25	6	2006
12	離院と自殺企図を繰り返す統合失調症患者に対する1対 1作業療法の意義について	大島久典, 四本かやの	作業療法	26	2	2007
13	寝たきり状態からの脱出の支援	長谷川由美子, 山田孝	作業行動研究	10	1・2 合併号	2007
14	癌告知を受けた女性に「生きる証」の作業をもたらし た叙述に基づく作業療法	原田佳典, 野藤弘之	作業行動研究	10	1・2 合併号	2007
15	意欲低下を示した後期高齢女性に対するナラティブを重 視した作業療法の効果	木村美久, 山田孝	作業行動研究	11	1	2007
16	緩和ケアにおける OSA II の有効性	大形篤	作業療法おかやま	17	/	2007
17	作業機能障害を予防して活動的な生活を再構築できた事 例～作業に関する自己評価・改訂版 (OSA-II) を用いた 作業療法経過から～	河津拓, 野藤弘幸	作業行動研究	11	2	2008
18	価値は作業形態を超える～Potentiality の実践～	福田久徳	作業科学研究	2	1	2008
19	作業同一性を反映した作業に焦点をあてた訪問リハビリ テーションがクライアント夫婦のコミュニケーションと 交流を深めた事例	南征吾, 野藤弘幸, 山田孝	作業行動研究	12	2	2009
20	入退院を繰り返す中で, 作業適応を再獲得した高齢女性	宮本優子, 野藤弘幸, 山田孝	作業行動研究	12	2	2009
21	介護老人保健施設に入所している脳卒中維持期のクライ アントに対する人間作業モデルを活用した作業療法実践 ～重度の麻痺と失語症の事例に対する作業療法の実践～	篠原和也, 澤田有希, 山田孝	作業行動研究	13	1	2009
22	価値ある作業に従事することで生活を再構築し始めた事例	宗形智成, 藤本一博, 山田孝	作業行動研究	14	2	2010
23	「何したらいいかわからない」と語る統合失調症者に対す る地域生活移行支援～人間作業モデルを用いた介入～	青山克実, 永久泰道, 他	作業行動研究	14	3	2010
24	興味と価値をおく作業への参加が自己効力感の向上に結 びついた事例	林孝祐, 野藤弘幸	作業行動研究	14	3	2010
25	高齢期の危機と気づき—ユリとハナの新生活構築 2. ハ ナ (作業療法が介入したケース)	小田原悦子, 坂上真理	作業療法ジャーナル	44	8	2010
26	がん生存者に対する協力的作業療法の有用性	沼田士嗣, 村田和香, 池田保	作業療法	29	4	2010

る作業活動'が1件であった。

3. 「意味のある作業」の 카테고리と内容

文献から得たカードは213枚であった。カテゴリは《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》《心身機能と行動の改善を促す》《他者との関係に変化をもたらす》《希望をもたらす》《新たな自分につながる》の7つになった(表2)。以下にカテゴリについて検討する。なお、本稿ではカテゴリを《 》, 下位カテゴリを〈 〉, カード内容は『 』で表現した。

1) 《自ら意思表示した》

OTで取り組む作業を模索する段階での会話や面接評価の記述から生成された。カードは『本事例が最も重要とした』『自らやりたいと申し出た』等であり、クライアントがその作業を希望し指定したという内容であった。

2) 《興味がある》

下位カテゴリは〈興味がある〉〈楽しめる作業〉〈満足できる日課〉であった。カードは、クライアントがその作業に元来興味を持っていたことと従事して楽しさを感じたこと、その作業を核にして生活を形作っていったという内容であった。クライアントの興味は興味チェックリストや会話、作業を試みることで示され、それにより間接的にその作業を希望していた。

3) 《生活史の中にある》

下位カテゴリは〈生活史の中にある〉〈生活史を反映した作業〉であった。〈生活史の中にある〉は過去の経験と直結した作業であることを示していた。〈生活史を反映した作業〉は『幼少時に父親から「姿勢を正しなさい」と厳しく育てられた』『左官業に就いていた』など、「意味のある作業」とつながりのある過去の経験の記述から生成されていた。OTRは本人の語りや家族からの情報を基にこれらを明らかにしていた。

4) 《心身機能と行動の改善を促す》

下位カテゴリは〈心身の改善を促す〉〈苦痛を軽減させる〉〈意欲と行動の改善を促す〉であった。「意味のある作業」に取り組むことでクライアントの『全身の筋力や持久力が改善』され『落ち着きを取り戻す』など心身機能の改善が促された。また『調理に没頭している間はしびれ感を口にするこ

とはなく』など、クライアントの苦痛を軽減した。さらに『詩吟の本や道具の準備をしてくるようになった』『オムツいじりや脱衣行為は見られなくなった』など意欲と行動の改善も促した。

5) 《他者との関係に変化をもたらす》

下位カテゴリは〈交流を促す〉〈役割を獲得する〉〈人的環境の変化を促す〉〈OTRと協業関係を構築する〉であった。「意味のある作業」へ従事することで周囲との交流が促された。それによってクライアントは、『(先輩として)…作業を教え、間違いを指摘する事もあった』など、役割を遂行し獲得した。さらに、『母親も…退院を認めた』など人的環境の変化も促した。OTRとの関係では『作業上の問題を解決するパートナーだと認識』するなど、協業関係を構築した。

6) 《希望をもたらす》

下位カテゴリは〈生きる支え〉〈目標につながる〉であった。「意味のある作業」に従事することそのものがクライアントの生きていく気持ちを支えていた。それが『動けなくなるまで教えたい』『これを作れば明日から生きていける』と表現されていた。また、その作業に従事することが『家のことができるようになりたい』『せめて誰の手も借りずにトイレに行きたい』など、目標の語りにもつながった。

7) 《新たな自分につながる》

下位カテゴリは〈自信につながる〉〈自己の再定義を促す〉〈新たな作業につながる〉であった。クライアントにとって「意味のある作業」に取り組むことそのものが自信につながり、自己の再定義を促した。これが『脳梗塞後のAさんは写真を嫌い…顔を覆う姿であったが…記念写真を残した』『自分の生き方を…肯定的にとらえ直すきっかけになった』と表現されていた。さらに『週に一度の音楽療法に参加し、歌も聴き、歌うことも始めた』など新たな作業へも取り組み始めた。

4. カテゴリと事例報告の関係

生成されたカテゴリと各事例報告の関係を検討した(表3)。

事例に最も多く含まれたのは《新たな自分につながる》の18件であり、次いで《心身機能と行動の改善を促す》15件であった。

表2 分析結果

カテゴリー	下位カテゴリー	カード数	カード例（文献番号）
自ら意思表示した	自ら意思表示した	9	COPM 評価で、本事例が最も重要とした。(No2, No3)
			機能訓練を希望した。(No6)
			経過の中で表出した意志、つまり、価値を置く寝返り、起き上がり、立ち上がり、歩行といった動作・行為に対し、(No13)
			自らやりたいと申し出た。(No10)
			Kさんは入院前に興味をもって行っていた料理が中断されており、退院後にできるかどうかが一番の心配事であると語った。(No9)
			本人がくつろぎ、楽しめる作業として挙げた漫画や音楽鑑賞 (No23)
			OSA II で「満足できる日課がある」、「自分の目標に向かってはげむ」の項目を該当なしとしたため、そこに注目した面接で、「いつも途中でやめだから何かしたい、日課がほしいな」との発言があり、余暇活動に対しての重要性を感じた。(No16)
			COPM より、作業遂行の問題点としてあがった。(No4)
興味がある	興味がある	7	高齢者版興味チェックリストは、…絵画制作に興味をもち、(No19)
			Aさんの興味をふまえた作業形態の導入と技能の披露は、(No20)
			長女に、事例に代わって興味チェックリストと役割チェックリストを実施してもらった。その結果、特に強かった過去の興味に、外出、旅行、流行歌、料理・食事、折り紙、おしゃれ、ガーデニングなどが、挙げられた。(No21)
			五日並べの受け入れが良く、(No15)
			(日本高齢者版興味チェックリストの結果で、)「園芸・野菜作り」「歌を聴く」「買い物」に強い興味を表明した。(No24)
			ハナは手芸に興味をもち、(No25)
	楽しめる作業	8	NPI 興味チェックリストの要約としては、手工芸技術における興味の割合を高く認め、プラモデルがその中でも高い興味を示した。(No16)
			その作業ができている状況に喜びを感じていることを示していると考えられる。(No10)
			詩吟を楽しみにする様子が伺えた。(No11)
			調理練習は、前日から担当作業療法士に「先生、明日はサラダ油もいるわ」と笑顔で話して、楽しみにしていた。(No17)
	満足できる日課	10	活動自体を楽しむことができるようになってきた。(No23)
			ハナは周囲の人たちのために作品をつくることを楽しみ、(No25)
生活史の中にある	生活史の中にある	8	個にとって有意義な作業と生活を再び作り出していくことに繋がる。(No5)
			(音楽鑑賞・映画鑑賞などでは) 表情も明るくなり、(No23)
			入所したハナは、充実した一日の過ごし方をつくっていった。(No25)
			個人作業療法よりも集団生産作業療法の方が「仕事をしてるって実感が湧く」とA氏は主治医らに話し、(No7)
	生活史を反映した作業	4	「プラモデルを作ることによってやっぱり時間を忘れられるから大好きで毎日が楽しかった」と語られた。(No16)
			詩吟を50年以上続け、定年後は「詩吟の先生」をしていた。(No11)
			故郷を離れてから現在までの生活歴を考えると、散歩中の環境は故郷の自然を快く想起させる。(No12)
			Aさんの人生を通じて「生きる証」であった生け花を作業として用いることにした。(No14)
			実は昔、夫とよく行っていた馴染みの深い遊びだったことが判明した。(No15)
			「園芸」については、「元気な頃はよく花を育てた」と前向きな発言が聞かれた。(No24)
			幼少時に父親から「不自由な体であるから、人の倍、努力しなさい。姿勢を正しなさい」と厳しく育てられた。(No6)
			絵画制作が、Aさんの作業生活歴を反映した作業形態であり、(No19)
			事例の過去の生活物語に反映された興味・価値を置く活動 (No21)
			A氏は中学卒業後、左官業である長兄のもとでX-5年まで左官業に就いていた。手際の良い職人だった。(No22)

表2 分析結果(続き)

カテゴリー	下位 カテゴリー	カード 数	カード例 (文献番号)
心身機能と行動 の改善を促す	心身の 改善を促す	18	ワープロ作業への取り組みが、A氏の情動の安定化に影響を与えていた可能性が強く示唆される。(No10)
			精神的にも落ち着きを取り戻した。(No11)
			(作業の使用が)活動性の向上を引き出したと考える。(No1)
			夜間の徘徊がほとんどみられなくなった。(No19)
			オムツいじりや脱衣行為は見られなくなった。(No22)
			精神症状も落ち着いてきた。(No23)
			全身の筋力や持久力が改善され、(No24)
			奇妙な行動が消失した。(No7)
	苦痛を 軽減させる	3	さらに日常生活における情動面では今まで過度に注意が向いていた事柄(暴力行為のささいなきっかけ)に対して注意が払われることを減少させ、(No10)
			調理に没頭している間はしびれ感を口にするのではなく、(No17)
心身機能と行動 の改善を促す	意欲と行動の 改善を促す	33	時に腰痛や腹痛で苦しむことがあっても、必要以上に落ち込まず、(No25)
			知的な雰囲気や漂う“あこがれ”を実現できる作業であり、その作業に従事できることが意欲の向上をもたらしたと考えられる。(No10)
			詩吟プログラム開始後、Iさんは昔用いていた詩吟の本や道具の準備をしてくるようになった。(No11)
			良好な作業機能状態に至ったのだと思われる。(No26)
			できることをもっと楽しみたいという意欲の向上につながったのではないかと考えることができる。(No15)
			「リハビリをしてちゃんと料理ができるように」、「もうちょっと難しい料理ができるように挑戦したい」と前向きな発言が認められた。(No17)
			音楽鑑賞・映画鑑賞などの余暇の作業や運動グループには意欲的に取り組んでいた。(No23)
			参加当初には、第一筆者がAさんに「花作りは大変ですね」と話すと、「何もできないわ」と話すことが多かった。しかし、徐々に「昔は菊など栽培が難しい花もよく作った」とか、「花を育てるのは好きです」と前向きな発言が聞かれるようになり、(No24)
			ハナの生活態度は前向きになり、(No25)
			将棋を打つ際に「その手は良くない」「あなたのために将棋の打ち方を教えてあげる」などセラピストに対して様々な指導を行う場面が多く見られた。(No18)
他者との関係に 変化をもたらす	交流を促す	10	A氏が毎日子発的に作業療法に参加できるようになり、(No7)
			「作っていたら時間を忘れられるな」などの自発的な発言が見られ、(No16)
			活動性の向上を引き出したと考える。(No1)
	役割を 獲得する	18	うなずきや微笑みなどの反応を引き出したことに効果があったと思われる。(No21)
			園芸教室参加時は、花の水やり、枯れ葉を抜くなどの簡単な花の手入れをしながら、他の参加者と「花、きれいですね」と話そうになった。(No24)
			笑顔で家族、親戚、周囲の人々との交流を回復していった。(No25)
			徐々に作業に没頭するのではなく、一緒に雑談したりしながら作業を行うようになっていった。(No7)
			興味のある活動を行い、重要な「家族」から活動を行うことについて保証されることは、役割に対し充実感を得ることができたと考える。(No1)
			画業を行うことを自分の役割に位置づけている。(No19)
			家族旅行の写真や折り紙を折って見せたり、話しかけたりするアプローチは、事例の過去の価値や役割に関わる活動を回想させたことや、(No21)
他者との関係に 変化をもたらす	役割を 獲得する	18	詩吟を教えるという役割を得て、(No11)
			「いっぺんにはできないからぼつぼつ洗濯とか掃除、料理をしていきます」、「お父さんが帰ってくるまでにはご飯を作ります」と、再び主婦としての役割に意味と目的を見出す発言を得ることができて、(No17)
			娘が面会に来たときに「あなたも忙しいから早く家に帰りなさい」と話し、(No24)
			ハナは入所している高齢者たちにも作品づくりを教え、(No25)
			新しく作業を始めようとする利用者に、きちんと照れながらも説明をし、作業を教え、間違いを指摘する事もあった。(No7)
			背景には息子の面倒を見るといった母として、妻として、また地域集団における個人としての重要な役割があることがインタビューより明らかになった。(No4)

表2 分析結果(続き)

カテゴリー	下位カテゴリー	カード数	カード例 (文献番号)
他者との関係に変化をもたらす	人的環境の変化を促す	6	<p>「家族」に対する協力要請の結果、家族の中で活動についての会話が行われるようになった。(No1)</p> <p>担当作業療法士も「訓練」を彼女が行うことであることに同意し、(No6)</p> <p>忘年会での発表の結果、他者からの強い正のフィードバックによって、(No11)</p> <p>「でき上がったら、子どもたちに壁にかけてもらて、あの人たちも喜ぶ。ナミ(ハナの娘)が招き猫(ハナがつくった手芸作品)を魚屋のおじさんに贈ったら、気に入ったって、それはうれしいの」。(No25)</p> <p>退院には否定的だった母親も…退院を認めた。(No7)</p>
	作業療法士と協業関係を構築する	4	<p>絵画制作を通してAさんの作業生活歴を共有することは、さらなる治療的関係の進展をもたらしたといえる。(No19)</p> <p>交換絵日記は、OSA IIの結果から得られた『自分の能力を発揮する』、『他人に自分を表現する』のを保障した。(No26)</p> <p>担当 OTR を作業上の問題を解決するパートナーだと認識し、(No26)</p>
希望をもたらす	生きる支え	8	<p>それがS氏を支えていた。(No5)</p> <p>本人は「もう歩けなかった」と涙を流して喜んでくれた。(No8)</p> <p>症例にとってのワープロ作業は他の作業と違う意味を持っていた。(No10)</p> <p>Iさんは詩吟を動けなくなるまで教えたいという価値を見出した。(No11)</p> <p>ハナは、インタビューの中で、この穢と共同でつくった手芸を「これをつくれば、明日から生きていける」経験と表現した。(No25)</p>
	目標につながる	22	<p>限られた病院生活の中で、S氏が模索し作り上げてきた作業であり、(No5)</p> <p>彼女にとって「訓練」とは、「歩く」ことができるようになるためのものであった。(No6)</p> <p>能力の自己認識である個人的原因帰属からもたらされた選択状態である『もう少し動けるようになりたい』ことを達成することとした。(No13)</p> <p>今後もその作業形態を継続していきたいというAさんの希望を明らかにすることができた。(No19)</p> <p>Aさんは「せめて誰の手も借りずにトイレに行きたい」と今後の目標を語った。(No20)</p> <p>将来の役割には「友人」、「家族の一員」、「(できる範囲での)趣味人」が挙げられた。この将来の役割として挙げられた3つは、価値を置く役割でもあった (No21)</p> <p>(OSA で) 問題ありとした「自分と一緒にやってくれる人」を第1位、まずまずとした「自分を支え、励ましてくれる人」を第2位として、改善したいことに挙げた。(No8)</p> <p>A氏が価値を置くことのできる作業(左官業) (No22)</p> <p>Aさんは「家に帰ったら、炊事、掃除、洗濯など家のことができるようになりたい」と希望していた。(No17)</p> <p>将来は看護師か車の整備士になりたいなど、今後の希望についても口にするようになった。(No23)</p> <p>「自分の目標に向かって励む」では、有能性尺度、価値尺度とも3~4点となった。(No16)</p>
新たな自分につながる	自信につながる	4	<p>この遊びで勝つという経験は、自分にもできるものがあるという有能感を獲得させ、(No15)</p> <p>少しずつ自信がついてきている。(No23)</p> <p>A氏の自信を高めた (No7)</p>
	自己の再定義を促す	8	<p>「前からこういうのやってみたいと思っていたんだ。けどわたしバカでしょ。だからだめだと思っていたんだけど」と話したことは、なかなか踏み出せなかったが、気持ちのどこかでその思いを持ち続けていたことを、(No10)</p> <p>脳梗塞後のAさんは写真を嫌い、…顔を覆う姿であったが、作品を前にして、他クライアントとともに記念写真を残した。(No14)</p> <p>これまでは悲観的にとらえていた自分の生き方を良いものであったと肯定的にとらえ直すきっかけになった。(No15)</p> <p>できないことなど見栄を張らないように気をつけているなど、自らの課題を語るできるようになった。(No23)</p> <p>自分を再定義するようになった。(No25)</p> <p>A氏は「これはダイケアやからやれてるんです」と入院中よりも自分の状態を適切に把握できるようになってきた。(No7)</p>

表2 分析結果(続き)

カテゴリー	下位 カテゴリー	カード 数	カード例 (文献番号)
新たな自分につながる	新たな作業につながる	33	作業療法室での話題を病棟に戻ってから他患者や職員に話しかけ、更なる情報の収集を行うようになった。(No1)
			対象者自身が主体的に物事を考え、表出し、実行していく過程を引き出す。(No5)
			障害年金の受領に必要な書類記入の下書き練習を行うなど、「歩くこと」以外の作業に関して、担当作業療法士に援助を求めるといったことが開始された。(No6)
			落款印を押した頃より、Aさんと妻は戸外への散歩を受け入れ、自宅玄関前を一緒に散歩すること…通所リハビリテーションの利用も再開した…玄関先のポストまで新聞を取りに行きはじめた。(No19)
			作業療法終了後も、他クライアントに励まされつつも、励ます行動をAさんがとっていたことと結びついた。(No20)
			Aさんは、5月には、杖歩行訓練を再開した。(No8)
			ナースコールの使用、排泄の意志表示や依頼を自らするようになった。(No22)
			ワープロ作業自体に対して価値を置くという意味性に加え、認知・実行機能という知的活動の経験、また、それを実行することで日々もたらされる充足、達成感ややりがいといったものが次の行動を後押しし、継続に繋がるという連鎖を生み出していたのではないかと。(No10)
			役割遂行を重ねるうちに詩吟をもっと教えたいという内的期待を高めていった。(No11)
			Aさんにとって、日常の課題を順に解決し得られる成功体験は、新たな探索から可能性、そして達成へと至る積極的な作業選択を引出し、(No26)
			ネット手芸では、一つの作品を終えた後で、次にすることを確認すると、初めは「私も何かしようと思ってみよけど、今いち、ぱっとこないんだ。やっぱり話したり聞いたりするのがいいね」と話していた。しかし、1週間程して「何かしないとボサッとしちゃうから、ティッシュケース作るのやりたい」と言い、自ら種目を選ぶようになった。(No15)
			週に一度の音楽療法に参加し、歌も聴き、歌うことも始めた。(No24)
			ついに、手芸をするために、老健施設への入所を希望した。(No25)
			家族の理解と協力を得て、最終的には外泊時に独りでバスを利用して自宅に帰ることができるようになり、(No7)
			作業活動を通じてAさんとの信頼関係を築くことで新たな希望「釣りの本が読みたい」が語られ、(No16)

作業に従事する前の記述を含むカードから生成されたカテゴリーは《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》であった。他のカテゴリーは作業に従事した結果の記述から生成された。クライアント自身がその作業を希望したという内容のカテゴリーは、直接的には《自ら意思表示した》のみであったが、《興味がある》も興味を示すことで間接的に希望していた。他のカテゴリーは多くのカード内容が、情報やクライアントの言動からのOTRの判断の記述であった。

1事例中のカテゴリーが1つの事例は、《自ら意思表示した》を含む3事例と《生活史の中にある》を含む1事例であった。また、《自ら意思表示した》《新たな自分につながる》《生活史の中にある》は、全体の92.3%にあたる24事例に、どれか又は複数のカテゴリーが含まれていた。

IV 考察

1. 文献検索結果について

手検索を加えた文献検索の結果、1990年代の文献は挙がってこなかった。

先行研究より、日本作業療法学会の演題抄録に「意味のある作業」が使用されたのは1997年以降であり、1998年以降2001年までは2～5件であった。その後、件数は2010年の24件に向けて少しずつ増加していた⁵⁾。このことから、1997年～2001年頃までの期間は、「意味のある作業」とその言葉を使用する考え方が、国内に広まり始める時期であったとみなされる。また一般に、臨床場面での経験をまとめ発表するには、学会発表よりも論文の方がより難しく、掲載までに時間を要する。これらの理由により、1990年代には「意味のある作業」を用いた事例報告論文を見出すことができなかったと考えられる。

表3 事例報告とカテゴリーの関係

事例報告 No	[作業に従事する前の記述を含むカードから生成]			[作業に従事した結果を記述したカードから生成]			
	自ら 意思表示した	興味がある	生活史の 中にある	心身機能と行動 の改善を促す	他者との関係に 変化をもたらす	希望を もたらす	新たな自分に つながる
1				○	○		○
2	○						
3	○						
4	○				○		
5		○				○	○
6	○		○		○	○	○
7		○		○	○		○
8						○	○
9	○						
10	○	○		○		○	○
11		○	○	○	○	○	○
12			○				
13	○					○	
14			○				○
15		○	○	○			○
16	○	○		○		○	○
17		○		○	○	○	
18			○	○			○
19		○	○	○	○	○	○
20		○				○	○
21		○	○	○	○	○	
22			○	○		○	○
23	○	○		○		○	○
24		○	○	○	○		○
25		○		○	○	○	○
26				○	○		○
該当事例数	9	13	10	15	11	14	18

○：事例報告中にあるカテゴリー

2. カテゴリーについて

「意味のある作業」に含まれるカテゴリーは《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》《心身機能と行動の改善を促す》《他者との関係に変化をもたらす》《希望をもたらす》《新たな自分につながる》の7つであった。

これらのカテゴリーのうち前3者は作業従事前の記述を含むカードから生成したカテゴリー（以下、作業従事前のカテゴリー）であり、それ以外は作業に従事した結果を記述したカードから生成されたカテゴリー（以下、作業従事後のカテゴリー）であった。

1) 作業従事前のカテゴリー

含まれるカテゴリーは《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》である。

《自ら意思表示した》は、クライアントが作業を自ら希望したことを表す。その希望は、自分がその作業をやりたいか、やらなければならないか、行うことができるか、自分にとって重要か、楽しさを予想できるか、などの要素を考えて表出されたのだろう。これは自らの今後を決める行為である。

これまでに、クライアントの自己決定を尊重することが情動的な改善や行動の意欲を高める有効な手段となり得るとする報告¹⁵⁾や、パーソナルコントロールの重要性について述べた報告がある¹⁶⁾。パーソナルコントロールとは自分の環境を自分で統制しているという感覚であり、これにより人は身体的、心理的に改善する。反対に、この感覚が感じられなければ学習性無力感を感じ解

決可能な場面でも行動しないことやうつに陥ることもあるとされている¹⁷⁾。クライアントが自ら判断した作業に従事することは、パーソナルコントロールを促進し、心身機能の改善と次の作業への動機づけにつながると考えられる。

《興味がある》は〈楽しめる作業〉と〈満足できる日課〉を含む。楽しめる作業に日々取り組むことが、生活の充実感と満足できる日課を生み出した。日課は日常生活を形づくる¹⁸⁾。楽しめる作業が日課のある楽しい生活を可能にすると考えられた。

《生活史の中にある》は、生活史に直結した、又は関連した作業を示していた。人生は作業で構成される。そして、その意味付けは文化的背景を媒介として各人で異なる¹⁹⁾。OTが必要な状況は人生における危機であり、クライアントにとっては自らの物語が中断され未知の場所へ迷い込んだような気持ちであると想像される。その状況で《生活史の中にある》作業に再び従事することは、自らの物語を取り戻し、困難を抱えながらも再び続きを歩き出す感覚につながるのであろう。

作業従事前のカテゴリーから、「意味のある作業」は、クライアントの自分に対する理解と、これまでと今後の人生にかかわる作業であると考えられた。

2) 作業従事後のカテゴリー

カテゴリーは《心身機能と行動の改善を促す》《他者との関係に変化をもたらす》《希望をもたらす》《新たな自分につながる》である。

これらのカテゴリーから、クライアントは作業従事により成功体験を得ていることがわかる。そのため、能力に合わせて作業を段階づけるOTRの援助が不可欠である。ゆえに、「意味のある作業」はOTRが援助する作業であると考えられた。

《心身機能と行動の改善を促す》は、作業に従事した結果である心身の改善と、それに伴う意欲と行動の改善であった。クライアントにとって、取り組む作業が夢中になれる要素を持っているために生じた結果と考えられた。

《他者との関係に変化をもたらす》では、作業を遂行することが、その場にいる他者や協力する人

との交流の促進とOTRとの信頼関係を構築することを示していた。また、その状況を見た他者の、クライアントについての認識の改善も含まれていた。

意味のある作業を多く実施していると認識する高齢者は客観的QOLである対人関係と環境面が充足し、主観的QOLである生活満足感や心理状態が保たれていたという報告²⁰⁾や、前頭連合野の活動は報酬の量が多くなるほど大きくなり、人間におけるその報酬の一つに、他者からのフィードバックや人間関係自体があるという報告²¹⁾もある。作業を通じた人的環境との関係の変化は、クライアントの精神・心理面の改善に重要であると考えられた。

《希望をもたらす》には〈生きる支え〉〈目標につながる〉が含まれていた。人生の危機にクライアントは、自分らしい作業にまだ従事できることや、考えていた以上に自分はできることに気づく。また、その作業に従事し続けることで作業の目的を見つけ、自分らしさを保っていけることを感じ、今後の自分の目標を考えることができたと考えられる。

《新たな自分につながる》は、〈自信につながる〉〈自己の再定義を促す〉〈新たな作業につながる〉が含まれていた。前述のように、人は作業に取り組む際、多くは目的を考える。目的意識を持つことで意欲的に機敏に動くことができ、うまくできたことが次の行動に対する自信につながる²²⁾。その作業に従事することが、自分にもできることがあるという生きる支えを得ることになり、壊れかけていた自己イメージを作り直す契機になった。さらに、その事を支えにして次の作業に従事することにより、新たな自分として前進しようとする気持ちを表現していた。

作業従事後のカテゴリーによりクライアントの変化を追うと、《心身機能と行動の改善を促す》と《他者との関係に変化をもたらす》は作業に従事することによるクライアントと環境の直接的な変化であり、《希望をもたらす》は内的な変化の始まりを示している。さらに《新たな自分につながる》は、それまでの変化を基に未来へ向けた行動を開始し実践する状況と考えられた。

カオス理論では、混沌とみられることは、新しい秩序を生み出す新たなエネルギー状態であり、十分なエネルギーがあれば、新たな状態が簡単に出現するという²³⁾。これについてチクセントミハイは、心の動きも同じ原理に従っていると述べた。そして、カオスと見做される破壊的な状況を受け止め、それを、勇気、立ち直る力、我慢強さ等によって肯定的なものに変換対処することを心の散逸構造と呼んだ²⁴⁾。

「意味のある作業」は、障害が残った自分を受け入れられず葛藤しているカオスの状態から、それを受け止め、秩序ある新たな自分を再構築する作業ということができよう。

3) カテゴリーと事例報告の関係

対象の事例報告は、作業従事前と従事後のカテゴリーどちらかのみ報告もあった。「意味のある作業」は《自ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》のように作業に従事する前に判断されるが、一方では、その作業に従事したクライアントの変化から気づく場合もあると考えられた。

また、全体の92.3%にあたる24事例に《自ら意思表示した》《生活史の中にある》《新たな自分につながる》のうちどれかのカテゴリーが含まれていたことから、OTRは、これら3つのカテゴリーのうちどれかの要素を持つ作業を「意味のある作業」とみなす傾向があるとみられる。この結果を改めて表現すると、「意味のある作業」は、クライアントの自分に対する理解と人生にかかわり新たな自分を再構築する、OTRが援助する作業であると考えられた。

V まとめ

我が国のOTRが使用している「意味のある作業」の内容と特性を検討した。対象は、国内で1995年度から2010年度に発行された雑誌の投稿による事例報告論文のうち、「意味のある作業」の言葉を使用した25論文26事例報告である。その作業が「意味のある作業」である理由について書かれた部分を抜粋し、内容分析によって生成したカテゴリーを検討した。

結果、「意味のある作業」のカテゴリーは、《自

ら意思表示した》《興味がある》《生活史の中にある》《心身機能と行動の改善を促す》《他者との関係に変化をもたらす》《希望をもたらす》《新たな自分につながる》の7カテゴリーであった。OTRはこのうち《自ら意思表示した》《生活史の中にある》《新たな自分につながる》のどれかのカテゴリーを含む作業を「意味のある作業」とみなす傾向があると考えられた。

「意味のある作業」は、クライアントの自分に対する理解と人生にかかわり新たな自分を再構築する、OTRが援助する作業であると考えられた。

VI 本研究の限界

本研究は1995年から2010年に発表された事例報告論文を基に行った。本研究結果はこの期間の臨床に従事するOTRの考えであるが、変化していく可能性がある。今後もさらなる分析、検討が必要である。

謝辞：本研究に多くの示唆を与えてくださった首都大学東京大学院人間健康科学研究科小林法一先生、首都大学東京大学院石井研究室の皆様、分析にご協力頂きました四条暁学園大学銀山章代先生、関西学研医療福祉学院河津拓先生に深く感謝致します。

文 献

- 1) Kielhofner G, Burke J P (山田孝・訳): アメリカにおける作業療法の60年～その同一性と知識の変遷について。作業行動研究, 5: 38-51, 2001.
- 2) カナダ作業療法士協会(吉川ひろみ監訳): 作業療法の視点 作業ができるということ。2-32, 大学教育出版, 岡山, 2002.
- 3) 山田孝編: クリニカル作業療法シリーズ 高齢期障害領域の作業療法: 52-58, 中央法規出版, 東京, 2010.
- 4) Scheartz K B: Reclaiming our heritage: connecting the founding vision to the centennial vision. Am J Occup Ther, 63: 681-690, 2009.
- 5) 大松慶子, 石井良和, 山田孝: 日本作業療法学会発表における意味のある作業とその類似の言葉の使用について。作業行動研究, 16: 176-182, 2012.
- 6) 大松慶子, 小林法一, 山田孝: 「意味のある作業」とそ

- の類似のことばが示す意味と関係について. 第46回日本作業療法学会プログラム: KI1104, 2012.
- 7) Townsend E A, Polatajko H J (吉川ひろみ, 吉野英子監訳): 続・作業療法の視点—作業を通しての健康と公正—: 441, 大学教育出版, 岡山, 2011.
 - 8) Hammell K W : Dimension of meaning in the occupations of daily life. *Can J Occup Ther*, 71 : 296-305, 2004.
 - 9) Goldberg B, Brintnell E S, Goldberg J : The relationship between engagement in meaningful activities and quality of life in persons disabled by mental illness. *Occupational Therapy in mental health*, 18(2): 17-44, 2002.
 - 10) 玄侑宗久: 今を移ろう人や時—変わりうる自分. 臨床作業療法, 5 : 276-281, 2008.
 - 11) 山岸俊男: 心でっかちな日本人 集団主義文化という幻想: 15-89, 132-209, 日本経済新聞社, 東京, 2002.
 - 12) 内田樹: 文春新書 251 寝ながら学べる構造主義: 59-77, 文芸春秋, 東京, 2004.
 - 13) 丸山圭三郎: ソシユールを読む: 40-69, 講談社, 東京, 2012.
 - 14) Lincoln Y S, Guba E G : *Naturalistic Inquiry* : 289-356, Sage Publication, California, 1985.
 - 15) 矢富直美, 吉田圭子, 高杉祐子: 軽食づくりをテーマにしたグループワークの効果. 短期プロジェクト研究報告書 パーソナルコントロールと健康: 71-74, 東京都老人総合研究所, 2000.
 - 16) 高橋龍太郎: 自立して生活する高齢者への作業療法解説. *JAMA日本語版*, 6 : 82, 1998.
 - 17) Peterson C, Maier S F, Seligman M E P (津田彰監訳): 学習性無力感 パーソナル・コントロールの時代をひらく理論: 17-60, 197-286, 二瓶社, 大阪, 2009.
 - 18) Kielhofner G (山田孝・監訳): 人間作業モデル—理論と応用, 改訂第4版: 55-73, 協同医書出版社, 東京, 2012.
 - 19) やまだようこ: 人生を物語る: 20-33, ミネルヴァ書房, 京都, 2000.
 - 20) 藪脇健司, 宮前珠子, 山田孝: 通所リハビリテーションを利用している高齢者の作業遂行に対する自己認識と客観的・主観的QOLの関係. 作業行動研究, 10 : 7-14, 2007.
 - 21) 竹田里江, 竹田和良, 池田望, 松山清治, 船橋新太郎: 作業が持つ意味を前頭連合野における認知と情動の相互作用から考える—神経科学的知見に基づいたこれからの作業療法に向けて—. 作業療法, 31 : 528-539, 2012.
 - 22) Nelson D L : Why profession of occupational therapy will flourish in the 21st century. *Am J Occup Ther*, 51 : 11-24, 1997.
 - 23) Kielhofner G (山田孝監訳): 人間作業モデル—理論と応用, 改訂第2版: 9-22, 協同医書出版社, 東京, 2004.
 - 24) Csikszentmihalyi M (今村浩明訳): フロー体験 喜びの現象学: 288-300, 世界思想社, 京都, 2013.

Abstract : The purpose of this study was to clarify “meaningful occupations in Japan”. We searched for case studies that included the words “meaningful occupations” and similar terms, and selected 26 case studies published from 1995 to 2010 for content analysis in this study. We found that essential expressions of “meaningful occupations” could be categorized into 7 groups: the occupations chosen by the clients; the occupations related to their interests; the occupations related to their life stories; the occupations that improved their minds and body functions and actions; the occupations that improved relations with other people; the occupations that fostered their hopes; the occupations that led to self renewal.

“Meaningful occupation” affects understanding for clients themselves and their lives, and it is thought that it was occupation to enable rebuilding of their identities. And it is the occupation that occupational therapists help.

Key words : meaningful occupation, occupational therapy, qualitative research

(2015 年 5 月 27 日 原稿受付)